

保育内容「表現」から真宗保育を考える

羽溪 了（龍谷大学 短期大学部）

これまで、保育現場の特に表現活動（造形）に関し、各種研修会、園や連合体による所謂  
展覧会、学生の保育実習等々を通して、こどもの表現活動の様々な環境、保育者の思いや関  
り、実際のこどもの表し等々に関わる機会を得てきた。その度に、『幼稚園教育要領』、『保  
育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が示す教育・保育の基本、保育  
のねらいや内容等に鑑みると、様々な問題が見え隠れする。この問題は、発表者の専門分野  
である造形に止まらず、音楽や身体表現分野でも同様に顕著である。保育のねらいと内容  
とされる領域「健康」・「人間関係」・「環境」・「言葉」・「表現」の所謂 5 領域の中でも、こど  
もの内面の育ちに最も関与する領域「表現」が、その主意を無視されるかのような環境や活  
動が顕著に露呈していると考ええる。

保育は個々の領域で展開されるものではなく、全ては生活をベースに様々な遊びを通し  
て総合的に展開されるという大前提、原点に常に立ち返ることが肝要である。そのことを意  
識させてくれることばを、大場幸夫は次の様に述べている。

「教育要領の領域『表現』の所だけを解釈し、理解したつもりになり、手を打っていけば  
いいのだろうか。いったいどういう人間を育てることなのか、という基礎からしっかりと考  
えていき、その中で人間としての子どものあらわしの部分ということ、表現ということをも  
ういうふうに大事な発達の側面として見ていくか、その為には他の側面との絡み合いの中  
で子どもの受容と表現という力を、人間の大事な部分として育てていくことがこれからの  
私たちがやらなきゃならないことなのだ。」（『表現原論 幼児の「あらわし」と領域「表現」  
フィールドノートからの試論』（〈新保育内容シリーズ〉大場幸夫 編、萌文書林、1996.8）

大場が述べる「いったいどういう人間を育てることなのか」という本質的な問題指摘を如  
何に受け止め考えればよいのであろうか？この問いは、私のこども観＝保育観を改めて問  
うものと考えられる。保育のなかでそのこども観＝保育観の揺らぎが際立つのが領域「表現」  
であると言えよう。

本発表では、改めて「こどもの表現をどう見るのか」という視点から、保育の揺らぎにな  
る問題点とその克服に、真宗保育が如何に寄与できるのか考えてみたい。その手掛かりとし  
て、近年のその保育内容で様々な変革を試み実践する保育園の実践事例を紹介し、そのねら  
いとするとところや意義を明らかにする。

宗派に縁ある幼稚園・保育園が、かつては宗派の組織教化の中で位置づけられていた流れ  
を断ち切り、現在の宗教教育という位置づけをも乗り越え、真に〈保育〉という観点に立ち  
こどもを中心におく保育を、更にはそのこどもに学び続け、その環境であろうとする保育者  
を、真宗保育が如何なる支えとなるのかを考えていく契機としたい。